

国立アイヌ民族博物館展示計画

平成28年5月

文化庁

目 次

I. はじめに	1
II. 国立アイヌ民族博物館の展示について	1
1. 基本的な考え方	
2. 対象とする地域・視点	
3. 対象とする時代等	
4. 展示の特色	
5. 展示の形態	
(1) 総合展示	
(2) 特別展示	
6. 展示資料・手法について	
(1) 展示資料について	
(2) 展示内容に応じた効果的な展示手法	
7. 展示解説について	
8. 展示ケースについて	
III. 展示の施設面について	4
1. 展示室の構成	
(1) 総合展示	
(2) 特別展示	
2. 動線について	
(1) 基本展示室の動線について	
(2) 展示室への資料搬入動線について	
3. 展示室の面積	
(1) 各展示室の面積配分	
4. 展示室の環境等について	
(1) 天井高・床など	
(2) 照明・外光	
(3) 空調	
(4) その他	
IV. 総合展示の具体的な構成	6
1. 総合展示の構成	
(1) 基本展示	
(2) テーマ展示	
(3) シアター	
V. 基本展示のストーリーと中・小テーマ	7
1. 導入展示	
2. 私たちの世界（信仰）	
3. 私たちの暮らし	
4. 私たちのしごと	
5. 私たちの交流	
6. 私たちのことば	
7. 私たちの歴史	
8. 子供向け展示	

表 国立アイヌ民族博物館基本展示 中・小テーマ一覧

I. はじめに

この博物館は、民族共生象徴空間*における六つの機能のうち、展示・調査研究機能の役割を果たす施設として、以下の理念と四つの目的を持つ博物館として、整備を進めることとしている。

(理念)

この博物館は、先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、国内外にアイヌの歴史・文化等に関する正しい認識と理解を促進するとともに、新たなアイヌ文化の創造及び発展に寄与する。

(目的)

- ・アイヌの歴史・文化・精神世界等に関する正しい知識を提供し、理解を促進する博物館
- ・アイヌの歴史・文化に関する十分な知識を持つ次世代の博物館専門家を育成する博物館
- ・アイヌの歴史・文化に関する調査と研究を行う博物館
- ・アイヌの歴史・文化等を展示する博物館等をつなぐ情報ネットワーク拠点となる博物館

文化庁は、平成 27 年 7 月に取りまとめた「国立のアイヌ文化博物館（仮称）基本計画」（以下、「基本計画」という。）において展示に関する方針等を定めており、更にこの内容の検討を深め具体化するため、外部有識者による「国立のアイヌ文化博物館（仮称）展示検討委員会（以下「展示検討委員会」という。）」及びその下に「展示ワーキング会議」を設置した。平成 28 年 4 月に展示検討委員会により「国立のアイヌ文化博物館（仮称）展示計画報告書」が取りまとめられた。この基本計画及び展示検討委員会の報告書を踏まえ、国立アイヌ民族博物館*の展示計画を以下に定める。

*平成 28 年 5 月 13 日に開催されたアイヌ政策推進会議において決定

II. 国立アイヌ民族博物館の展示について

1. 基本的な考え方

国内外の多様な人々に、アイヌの歴史や文化を正しく学び、正しく理解する機会を提供するために、アイヌの歴史・文化等を総合的・一体的に展示する。

- ・ともに考え、ともに育つ、未来へつながる展示交流の実現を目指す。
- ・歴史と現代の時間の流れを伝える展示を目指す。
- ・アイヌ文化の伝承者・実践者や道内外の博物館等と連携した展示体制を構築する。
- ・多様なニーズに対して訴求力のある展示を目指す。
- ・国際的な視点を持って世界に発信できる展示を目指す。

2. 対象とする地域・視点

アイヌの人々が居住してきた北海道、サハリン（樺太）、千島、本州東北地方を中心に、アイヌ文化が周辺諸地域との関わりの中で醸成されてきたことに留意した展示を行う。

3. 対象とする時代等

旧石器時代から現代までを対象とし、周辺の人々との交流を含めた広がりの中で多面的に取り上げる。

4. 展示の特色

- ・最新の情報を公開できるよう可変的な展示形態や展示システムとする。
- ・館内の解説パネルやサインは、アイヌ語、日本語、英語のほか必要に応じて多言語で対応する。
- ・ハード・ソフトの両面からユニバーサルデザインに配慮し、あらゆる人に開かれた展示環境を実現する。
- ・国内外の博物館とのネットワークを活用した展示会や巡回展を企画・実施し、象徴空間中核区域全体とも有機的なつながりを持った活動を行う。

5. 展示の形態

(1) 総合展示

アイヌ文化等の関係資料を中心に、アイヌの歴史・文化等に関する基本的な事象や専門的な内容を紹介する。

- ① 基本展示・・・・・・・・アイヌ文化等の基本的な事象を伝える展示とし、「私たちの」という切り口でアイヌの人々の視点で語る、次の六つの大テーマと導入展示及び子供向け展示で構成する。

- ・私たちの世界（信仰）
- ・私たちの暮らし
- ・私たちのしごと
- ・私たちの交流
- ・私たちのことば
- ・私たちの歴史

- ② シアター・・・・映像や音声でアイヌ文化等の概要を紹介する。

- ③ テーマ展示・・・・国内外の博物館等とのネットワークを活用し、最新の調査・研究成果に基づいた多様な切り口やテーマの展示を一定期間内に紹介する。

*平成27年7月に策定した「国立のアイヌ文化博物館（仮称）基本計画」で示した「子供向け展示」については、その機能を基本展示の中に組み込むことで、子供たちにも分かりやすく楽しめる展示とする。

(2) 特別展示

中長期的な計画を立てて企画し、アイヌを含めた世界の先住民族の関係資料を所蔵する国内外の博物館等と連携しながら、その歴史、文化に関する最新の調査・研究の成果等を紹介する。

また、アイヌ文化、先住民族文化以外のテーマについても幅広く検討する。

6. 展示資料・手法について

(1) 展示資料について

- ・ 考古資料、歴史資料、絵画資料、民族資料、文書資料、現代の美術・工芸作品、及びそれらの材料・素材等を収集し、展示する。
- ・ アイヌ文化等に関する写真、動画等の映像資料、音声資料、図書資料等を収集し、展示する。

(2) 展示内容に応じた効果的な展示手法

① 展示コンセプトと資料の特性に応じた展示

- ・ ケース展示や露出展示の選択は、資料の特性に加え、各コーナーの展示コンセプトを考慮する。
- ・ ハンズオン等、体験型の展示手法を合わせて取り入れる。
- ・ 多様な年齢層に対応できるように展示する資料の種類、配置を工夫する。

② 複製・模型等の活用

- ・ 実物資料の展示を基本とし、必要に応じて複製・模型等を活用する。

③ 最新の映像・情報技術の活用

- ・ 資料展示だけでは伝わりにくい展示資料相互の関係や背景を視覚的に紹介するため、最新の映像・情報技術等を活用した展示手法の導入を図る。
- ・ 来館者のニーズに応じて、多彩な情報を提供できる個人向けの携帯情報端末や、コンテンツの提供等の導入を図る。

これらの導入については、開館後の維持管理や展示替え、ランニングコスト等を考慮し、開館後も継続的に内容更新を行える計画や体制をあらかじめ構築しておくことが必要である。

7. 展示解説について

- ・ 展示解説は国内外の多様な来館者がアイヌ文化等を正しく学び、より深く理解できるよう、展示を補完する。
- ・ 身体障がい者等に配慮し、触れる展示による説明や、音声・点字等による解説、車椅子に対応した適切な高さや設置位置等を工夫する。
- ・ テーマに関係する様々な解説パネルを用意し、展示資料にキャプションを付して解説を行う。また、解説内容のレベルに応じて、大人用と子供用（展示の低い位置に置く）の2種類の作成を検討する。
- ・ 展示への理解を促進するツールとして、アイヌ語、日本語、英語をはじめとする多言語対応のほか、来館者のニーズに合わせた複数の種類の解説シート・ワークシートの作成を検討する。
- ・ 音声や映像による解説装置の貸出しや、来館者自身の携帯端末等を利用した解説方法についても検討する。
- ・ 展示観覧の前に博物館や展示について紹介するオリエンテーションや、展示を解説するギャラリートーク等を行い、展示への興味や理解の促進を図る。

8. 展示ケースについて

- ・「基本展示室」, 「テーマ展示室」, 「特別展示室」には, 壁付展示ケースを設置するとともに, 展示レイアウトの自由な変更が可能ないように, 可動の単体展示ケースも導入する。
- ・展示ケースの種類・数量・配置については, 展示設計において各展示資料や展示テーマごとに適した検討を行うとともに, 開館後の展示更新にも対応できるよう配慮する。
- ・展示ケースは, 展示資料の安全性や保存環境に配慮する。また, 展示作業の安全性, 機能性等を考慮する。
- ・展示ケースのガラスは, 高透過で十分な強度を持ったものを使用する。また, 地震などの災害や不慮の事故に備え, 合わせガラスや飛散防止フィルム貼り等の使用を検討する。
- ・展示ケース内の湿度調整に関わるエアタイトケース（高気密型ケース）やケース内の空調システムの採用に関しては, 展示資料, 展示環境等を考慮する。
- ・展示ケースに照明を設置する場合は, 調光可能とする。
- ・可動の単体展示ケースに関しては, 安定性を高め転倒しづらくするため, 重心の位置, キャスターの有無等について検討する。
- ・展示ケースの開口部は, 展示資料閲覧の妨げにならないよう配慮する。

III. 展示の施設面について

1. 展示室の構成

(1) 総合展示

総合展示は, 「基本展示室」, 「テーマ展示室」, 「シアター」の各室によって構成する。

① 基本展示室

「基本展示室」は極力柱のない大きな一つの部屋とし, 導入展示と「私たちの」という切り口による六つのテーマの展示で構成する。ロビー等の共用空間における導入展示を経て「基本展示」に入る配置とし, 「基本展示室」から基本展示に関連した展示を行う「テーマ展示室」へと直接の出入りを可能とする。

② テーマ展示室

「テーマ展示室」は, 可動壁により3～4室に分割できるようにし, 特別展示との一体的な利用も可能とする。また, 短期間での展示替えを可能にするために, 来館者の出入口とは別に, 収蔵庫や搬出入ヤード等からの資料搬入動線・出入口を確保する。

③ シアター

「シアター」は, ロビー等の共用空間から直接出入り可能な配置とする。また, 総合展示のガイダンス的役割を持つとともに, 小規模な講演会やレセプション等にも対応する機能を備える。

(2) 特別展示

特別展示は、「特別展示室」と「テーマ展示室」を、可動壁を活用して臨機応変に統合・分離し段階的に面積を変えて運用する。配置は、ロビー等の共用空間から直接出入りが可能な場とする。

2. 動線について

(1) 基本展示室の動線について

基本展示は導入展示からはじまり六つのテーマを配置する。テーマ間を自由に行き来できるよう基本はプラザ展示とし、アイヌ文化等の基本的な紹介が中心となる「私たちの世界(信仰)」、「私たちの暮らし」、「私たちのしごと」を入り口側に配置し、続けて「私たちの交流」、「私たちのことば」、「私たちの歴史」を配置する。

また、「テーマ展示室」では「基本展示室」と関連テーマでの展示を行うことから、「基本展示室」と「テーマ展示室」は隣接し、直接出入りが可能な動線とする。

(2) 展示室への資料搬入動線について

収蔵庫や搬出入ヤードから「基本展示室」、「テーマ展示室」、「特別展示室」への資料搬入動線に関しては、屋内動線を確保するとともに来館者動線と交わることをないように計画する。

3. 展示室の面積

(1) 各展示室の面積配分

室名		面積	備考
総合展示室	基本展示室	1,250 m ²	※1
	シアター	150 m ²	※2
	テーマ展示室	0～600 m ²	※3
特別展示室		400～1,000 m ²	※4
展示準備室		80 m ²	

※1 子供向け展示を含む。

※2 講堂・視聴覚ホール機能と併用可能とする。

※3 面積は可変とする。特別展示と一体での運用を可能とする。600 m²を可動壁で3～4室に分割可能とする。

※4 面積は可変とする。テーマ展と一体で運用する場合は、最大1,000 m²となるよう可動壁を配置する。

4. 展示室の環境等について

(1) 天井高・床など

- ・ 展示室の天井高は6～7 m程度を確保する。
- ・ 展示室の一体的・効率的な活用が可能となるよう考慮する。

- ・ 展示室の床は、1 m²あたり 500 kg以上の耐荷重を確保するとともに、展示更新が容易に行えるよう考慮する。

(2) 照明・外光

- ・ 「基本展示室」、「テーマ展示室」、「特別展示室」には窓を設けず、直射日光・間接光も含めて展示室内に影響を与えないようにする。
- ・ 「シアター」は、映像演出やレセプション利用を考慮し、スクリーンの開閉等による眺望を検討する。
- ・ 照明は、資料に影響を与えない機器を使用し、資料に最適な照度に調光できるようにするとともに、保存環境、メンテナンス性を考慮する。
- ・ 照明の色温度に関しては、その可変性も含め展示資料の種類や状態を考慮する。

(3) 空調

- ・ 温度及び湿度は、展示資料に影響を与えない最適な設定とし、最小限の運転時間で、所定の温度、湿度を維持できるように、建物本体の性能と併せて調整する。
- ・ 外気が直接展示室に進入しない設備とするとともに、塩害を防ぐ空調用フィルターを設置するなどの対策を図る。

(4) その他

- ・ 展示室の消火設備はガス消火とするとともに、防災対策を考慮した設備を設ける。
- ・ 映像・情報機器等の進歩とその導入に対応できるインフラを整える。

IV. 総合展示の具体的な構成

1. 総合展示の構成

(1) 基本展示

- ・ 基本展示室の冒頭に導入展示を配置し、アイヌ文化を象徴する資料や作品等で展示への期待感を高め、アイヌ文化に対するイメージや親しみを喚起する。
- ・ アイヌ文化等に関する知識が十分でない人も興味を持って、身近に感じられるよう、分かりやすい展示の構成や手法をとるとともに、アイヌ文化の持つ多様性を紹介する展示を目指す。
- ・ 「私たちの」という切り口で、アイヌの人々の視点で語る展示として構成し、一つ一つの事象の中の、歴史や伝統等を掘り下げ、過去から現代までを一体的に紹介する。
- ・ 子供たちも楽しんで見学し、学べるよう、展示や解説方法についても検討する。
- ・ 展示更新については、資料の入替えを中心に定期的に行い、より広範囲な展示更新は、中長期的な視点で計画的に行う。

(2) テーマ展示

- ・アイヌ文化等について、この博物館や関連機関等の最新の調査・研究成果に基づき、多様な切り口やテーマで紹介する。また、展開例としては「一種比較展示」、「地域特集展示」、「里帰り展示」、「世界の先住民族展示」、「プロジェクト展示」、「ことば展示」等が考えられるが、今後、開館後においても継続的に検討し、別途計画する。

(3) シアター

- ・歴史的な映像・音声資料や新たに収集・撮影する映像・音声資料等により、アイヌ文化等の概要や全体像を多面的に紹介するものとし、基本展示にて構成される導入展示、各テーマの内容と有機的につながる一体的な展開構成を検討する。

V. 基本展示のストーリーと中・小テーマ

1. 導入展示

民族共生をテーマとして、世界が様々な民族から構成されていること、また、その様々な民族の一つとしてアイヌや来館者それぞれが属する民族が存在していることを認識できる展示とする。同時に、来館者が現代のアイヌと対面する設定にすることで、展示室内外で見ることになる伝統的な文化が、過去の歴史を背景に、現代では展開されていないことを認識できる内容とする。

2. 私たちの世界（信仰）

<展示ストーリー>

アイヌの宗教（信仰）を理解するためのカムイ（神）の考え方や自然観、死生観を中心に展示を行う。アイヌの宗教（信仰）はアニミズム的・シャマニズム的な世界観を基調とし、多様な儀礼を形成してきた。儀礼の背景にあるカムイの考え方や使用される個々の祭具には、アイヌ独自のものがあると同時に、漆器類やイナウ（木幣）、シャマンの太鼓といったより広い地域に共通するものもみられる。展示ではアイヌ文化の独自性や他の文化との共通性について意識できるように心掛ける。

また、18～20世紀の祭具や口承文芸を素材に、カムイの世界がどのようにイメージされてきたのか（霊送り等）について理解できる内容とする。同時に地域差や仏教・ロシア正教等外来の要素、現代の振興運動等にも触れ、アイヌの宗教（信仰）の多様性や現代性をも伝える展示とする。

<◆ 中テーマ・◇ 小テーマ>

◆ カムイのくらす世界（カムイと自然）

カムイ（神）の視点に立って語られる神謡^{しんやう}を題材に、何がカムイとされ、どのように捉えられてきたのかを解説し、カムイや霊送りを理解する上で不可欠なラマツ（靈魂）についても紹介する。展示では、家の周囲・ものの細部等あらゆる場所に霊的な存在が認められていることを視覚的に表現し、創世神話等を紹介することで、人間世界の成り立ちや空間、異界の捉え方についても解説する。また、霊的な存在であるカムイと、現実の自然界に存在する動植物や火、雷といった自然現象等について、具体例を挙げながらその関係について紹介する。

- ◇ 神謡^{しんやう}とカムイの姿
- ◇ 国造り神話
- ◇ 自然のなかのカムイ
- ◇ ラマツの観念

◆ 儀礼のあらまし

儀礼を構成する諸要素（方位、祭場、祭壇、供物、ことば、仕草）やそれらを盛り込んで儀礼を行う意図を解説する。

- ◇ ヌサ（祭壇）、イナウ（木幣^{もくへい}）
- ◇ イクパスイ（捧酒箸^{ほうしゅぼし}）
- ◇ 祈り詞

◆ さまざまな儀礼

季節によって行われるさまざまな儀礼から、信仰が生業と結び付いたものであることを説明する。また、ヒグマの他、シマフクロウやカジキマグロ、クジラ等動物神を対象とした霊送りを紹介する。特に、20世紀後半から始まった儀礼の復興について、各地の初サケ儀礼、新築儀礼等を事例として紹介する。また、現代における他の領域の文化振興と命名・婚儀・葬儀等アイデンティティとの関わりについても紹介する。

- ◇ 季節による儀礼
- ◇ イオマンテ（霊送り儀礼）
- ◇ イワクテ（道具送り儀礼）
- ◇ 現代の儀礼の復興

◆ あの世（死生観）のとらえ方

各地に存在する他界へ通じる道の伝承から死後の世界観を解説し、先祖供養の考え方、神祭との違い、家系の考え方についても紹介する。

- ◇ アフナルパロ（あの世の入り口）
- ◇ 先祖供養

◆ 周囲の文化との比較

形状・用途が類似するユーラシア・北米の祭具等の事例から、周辺諸民族との文化的な共通点について紹介する。また、ロシア正教の受容や日本の寺社との関係等、外部の宗教がアイヌ社会の中

に取り入れられた過程等も紹介する。

- ◇ 削りかけ, 削り花
- ◇ シャマンの太鼓
- ◇ サケたたき棒
- ◇ 越境する宗教

3. 私たちの暮らし

<展示ストーリー>

衣・食・住・人の一生・音楽や舞踊に関わる分野について、時代の変遷の中で変化したもの、あるいは伝承されたもの等も含めて多面的に取り上げ、アイヌ文化の特色や地域差、伝承に携わる人々の取組を展示する。

展示は、衣装や建造物、玩具等^{がんぐ}、日常的に使用されている／いたもの、生活の中にみられる様々な人生儀礼（結婚等）の様子等を中心に紹介し、幕末～明治・大正期のアイヌの暮らしから現在までを対象として、アイヌの伝統文化と同時代性について理解を図ることを目指す。

特に、民族衣装は現在も盛んに制作され、儀礼の場面等で着用されているものの一つであるため、アイヌ文化の精華として極めて高い関心が持たれている。民族衣装の多様性や、制作技術復元の取組を紹介するとともに、伝承者の減少その他の問題に触れることで、文化伝承活動の意義を理解できる展示の構成を目指す。

<◆ 中テーマ・◇ 小テーマ>

◆ 今に息づく装い

伝統的な衣文化について、衣装の種類、地域差、刺しゅうをはじめ、儀礼での正装と普段着の違い、装飾品等について紹介し、制作技術や現代に伝わる技術の伝承活動についても紹介する。

- ◇ 衣装の種類・地域差・制作過程
- ◇ 受け継いできた人々
- ◇ 衣装以外の装身具
- ◇ 装いとしてのいれずみ

◆ 住まう —私たちの祖先がくらしした生活空間—

ジオラマやグラフィックを利用して幕末・明治期～昭和期の集落、また、集落内部の建物配置と、家屋内部の神聖な空間と上座・下座の認識を紹介し、伝統的な空間意識について理解を図る。その際、伝統的な^{かみまど}神窓の位置を意識して建てられた現代の住宅等を紹介することで、伝統的な空間認識が残っている事例がみられることを解説する。これらの展示に当たっては、神窓の向く方角や、伝統的家屋の地域差についても配慮する。

- ◇ 集落の立地と景観
- ◇ 生活空間

◆ 受け継がれる食文化

伝統的な料理について、各地域の代表的な料理と調理法、そのための用具類を紹介する。また、大規模な儀礼や葬儀との関連で伝承されてきた料理、日常の中で受け継がれてきた各種の料理（各地域のシト（団子）・ラタシケブ（あえ物）・オハウ（汁））の存在を示し、伝統的な食文化が過去のものではないことに理解を促す。薬効が期待されている植物茶等も紹介する。

- ◇ 祭りの食卓から
- ◇ 日々の食卓から
- ◇ 生活の中に息づく伝統食

◆ 人の一生

人生儀礼として誕生から死までを、結婚を挟みながら紹介し理解を深めるとともに、現在のアイヌの人生儀礼についても紹介する。

- ◇ さまざまな人生儀礼
- ◇ さまざまな遊び

◆ 受け継がれる芸能文化

伝統的な音楽と舞踊について導入的な説明を行った後、音楽・舞踊の基本的な性格について、実際に使用される楽器や映像資料等を活用しながら紹介する。また、現在行われているアイヌ音楽に関する諸活動についても紹介する。

- ◇ 各地域で伝承されてきた踊り
- ◇ 伝承されてきた歌
- ◇ 伝承されてきた楽器

4. 私たちのしごと

<展示ストーリー>

生活の根幹である狩猟・漁撈^{ぎよろう}・採集・農耕等の伝統的な生業活動を紹介し、続いて近代化の中で従事するようになっていった農業、漁業、林業、畜産業、観光業等のしごとについても広く紹介する。現代の展示では、アイヌの人々が、海外を含めた各地で様々な職業に就いて活躍し、身近な隣人として暮らしていることを紹介する。

全体の展示を通して、伝統文化が変化しつつも現代にまで継承されていることを、観覧者へ同時代性を意識させつつ紹介する。

「伝統的」な生業活動に関する展示では、生業技術の紹介にとどまらず、それと連関する世界観や伝統的知識の精華を伝えるように工夫する。展示資料（民具等）は厳選し、その使用方法等は体験型の模型等も用いて丁寧に解説することで観覧者に「楽しさ」を感じさせ、興味関心を高める。

<◆ 中テーマ・◇ 小テーマ>

◆ 先祖のしごと【江戸後期～明治】

狩猟、^{ぎょろう}漁撈、採集・農耕等、伝統的な生業活動の紹介を中心とする。百科事典的な展示ではなく、展示資料を厳選し、伝統知識やそれと連関する世界観を感じさせるような印象に残る展示を行う。体験型の模型等を用いて丁寧に解説していくことで記憶に残る楽しい展示を目指す。

- ◇ マキリ（小刀）
- ◇ 狩猟
- ◇ ^{ぎょろう}漁撈
- ◇ 採集
- ◇ 農耕
- ◇ 漁場労働

◆ 激動の時代のなかで【明治～昭和】

近代化の中で「しごと」も変化してきた。その中で苦しい生活や差別があっても、農林水産業や畜産業等、これまでなかった新たなしごとに就きながら時代を生き抜いてきたことを伝える。また、山菜採り等、現代も生業（なりわい）として伝統が受け継がれていることを紹介する。

それぞれの業種について、象徴的な道具1～3点を取り上げ、それぞれの道具の背後にあるストーリー（物語）を伝えることを主眼とし、「モノ」・「語り（できれば映像）」・「当時の写真」がワンセットとなるブースを複数配置することで構成する。

- ◇ 農業
- ◇ 漁業
- ◇ 林業
- ◇ 畜産業（酪農、競馬）
- ◇ 観光業
- ◇ さまざまなしごと（土木業、運送業、サービス業、公務員等）
- ◇ 伝統の継続

◆ 現代のしごと【平成～】

国内外を問わずあらゆる場所で、多様なしごとに就いているアイヌの人々がいるということ、身近な隣人として暮らしていることを、同時代性を意識させながら観覧者に伝える展示とする。その際、アイヌの民族としての多様性、いわゆる「伝統文化」にこだわらない民族意識の存在にも留意する。最後に、「私たちのしごと」のエピローグとして、子供たちが将来就きたいしごとを描いた絵で締めくくる。

- ◇ 隣り合う人々（1）海外でのしごとと暮らし
- ◇ 隣り合う人々（2）日本各地でのしごとと暮らし
- ◇ 伝統文化を^い活かす、広げる
- ◇ 未来のしごと

5. 私たちの交流

<展示ストーリー>

アイヌ文化は、隣接する東北アジアの周辺諸民族（和人やニヴフ、イテリメン等）との交流（交易）、現代では世界各地の先住民族との交流を通して現在に継承されている。生活の中に流入した交易品等の資料を紹介し、先住民族同士の交流の足跡をたどり、アイヌ文化の未来を考える展示とする。

また、和人及び外国人等による踏査の記録（文書、画像）から、アイヌ文化がどのように表象されてきたのかを紹介するとともに、19世紀以降の博覧会、観光の場において、また伝統文化の保存・復興の取組から、自らの文化をどのように表象してきたのかについて取り上げる。

最後に、世界の先住民族の民族政策や文化政策（あるいは状況）等を紹介し、近年の先住民族同士の交流を通して、日本における多文化共生の在り方及び先住民族の位置づけを示す。

<◆ 中テーマ・◇ 小テーマ>

◆ 生活圏と海を越える交流【近世】

隣接する諸地域との間で行われた特色ある交流について、移動の手段をはじめとして、東北北部、北海道、サハリン、千島の各居住地による地域的な特色を中心に紹介する。

◇ 旅・移動手段

◇ 北海道アイヌとその周辺（本州：和人）

◇ 樺太アイヌとその周辺（北サハリン～大陸：ニヴフ、ウイльтаほかツングース系諸民族）

◇ 千島アイヌとその周辺（カムチャツカ半島～北米：イテリメン、アリュート）

◆ 人びとをつなぐモノ【近世～近代】

朝貢や交易等で扱われた様々な交易品について、生活の中での使用法について紹介する。また、同じ交易品でも周辺諸民族では使用法が異なる点について比較する。

◇ 朝貢， 交易， 労働の場

◇ 儀礼の宝物

◇ 絹・木綿の流入と衣装の形態

◆ 外から見たアイヌ文化【近世～近代】

主に江戸時代から明治時代にかけて、交流や踏査を目的としてアイヌの村々を訪れた日本や欧米の役人や学者、漂流民等が記録した資料から、当時築かれたアイヌ文化のイメージを紹介する。

◇ 交流・踏査の記録としての画像資料

◇ 異国／異域／異民族のまなざしに映るアイヌ文化

◇ 博覧会への出場・出品

◆ 海外の先住民族との交流【近代～現代】

伝統的な文化を自分たちのイメージとして表現するようになった経緯をはじめとして、世界の先

住民族の一員として行動し、また位置づけられるようになった現代と未来について展望する。

- ◇ 〈伝統〉を魅せる—観光地そして「保存会」
- ◇ 世界各地の先住民族との交流
- ◇ 海外における先住民族政策

6. 私たちのことば

＜展示ストーリー＞

アイヌ語の基礎的な構造、地域差、地名、周辺諸言語との関係、言語復興の取組等を紹介する。また、アイヌ語にはその精華ともいえる口承文芸が存在する。口承文芸の様々なジャンル、あるいは過去の語り手と現在（将来）の語り手の口演を音声・映像資料を活用して紹介し、口承文芸の豊かな世界を体感することのできる展示の構築を目指す。口承文芸以外のアイヌ文学に関しても、その多様な取組について紹介する。

＜◆ 中テーマ・◇ 小テーマ＞

◆ アイヌ語の基礎

アイヌ語とはどのような言語なのかについて、発音、表記、単語や文の組立て等概要を解説し、アイヌ語の現状についても紹介する。

- ◇ アイヌ語の現状
- ◇ 発音と文字
- ◇ ことばの仕組み
- ◇ さまざまなアイヌ語
- ◇ アイヌ語の方言

◆ アイヌ語の歴史とことばの復興

アイヌ語の周辺諸言語の分布やアイヌ語と関連することばの仕組みについて解説する。また、アイヌ語を記した古文書、近代における話し手の減少と現代における言語の復興について、文書・画像資料等を活用しながら紹介する。特に、近現代におけるアイヌ語話者自身によるアイヌ語の記録や現代の言語復興における多様な取組について重点的に紹介する。

- ◇ 周辺地域のことば
- ◇ さまざまな外来語
- ◇ 古文書に見るアイヌ語
- ◇ アイヌ語と近現代
- ◇ アイヌ語の復興とこれから

◆ アイヌ語地名

アイヌ語地名の分布、地名の研究方法等について紹介し、更にアイヌ語地名の現在についても紹介する。

◇ アイヌ語地名とその分布

◇ 現代のアイヌ語地名

◆ アイヌの口承文芸

口承文芸の各ジャンルについて解説し、各ジャンルの語り方とその内容について音声・映像資料を活用しながら紹介する。また、口承文芸の継承に関しても、過去の語り手と現在（将来）の語り手の口演について映像資料等を用いて紹介する。

◇ 口承文芸とそのジャンル

◇ 口承文芸の語り方と内容

◆ アイヌ文学

近現代のアイヌ文学について総合的に解説し、アイヌ文学における多様な取組（短歌、俳句、自由詩、小説、随筆等）について紹介する。また代表的な作家とその作品に関しては、草稿等の文書資料を活用した展示を行う。

◇ 近現代のアイヌ文学

◇ 多様化するアイヌ文学

7. 私たちの歴史

＜展示ストーリー＞

旧石器時代から現代までの時間軸、及び周辺の人々との交流を含めた空間の広がりを重視し、重要なトピックを取り上げ、多面的な展示を目指す。その際、これまで考古学のタームに基づき通説的に用いられてきた9～13世紀における「アイヌ文化の成立」という表現は避け、通史的な継続が分かるような年代観とする。

具体的には、年表や地図を素材に時間軸と空間的ひろがりを概観する①「イントロダクション」に続き、②主に出土品の分析成果に基づいた展示ブロック（古代・中世）、③主に文献史学の成果に基づいた展示ブロック（古代・中世・近世）、④オーラル・ヒストリーの要素をも加味した近現代の展示ブロック、の3つの中テーマを設け、それぞれ分かりやすく重要なトピックを紹介することで、歴史的継続性と多様性を示す核とする。それに加え、⑤コラム的な展示を設け、アイヌ史の豊かさ・多彩さを示す。

＜◆ 中テーマ・◇ 小テーマ＞

◆ イントロダクション：私たちの歴史のひろがりをつらなり【イントロ】

東アジア・北東アジアの中の地理的布置や地政学的環境を概観し、列島文化の一つとしてのアイヌ文化を地理的に確認する。また、旧石器～近現代の継続性を重視した“アイヌ史”モデルを提起し、「差別」の歴史的背景を整理して提示する。

◇ 私たちの歴史のひろがり

- ◇ 私たちの歴史のつらなり
- ◇ 向けられる視線の意味

◆ 遺跡から見た私たちの歴史【考古核】

いわゆる考古学的「アイヌ文化」を遡る長期的視点を意識させ、汎世界的な時代区分である旧石器時代から、次第に現在につながる民族が形成されてくる過程を分かりやすく提示する。さらに、アイヌの民族としての形成のみならず、和人・アイヌ双方のあゆみについて理解を深める内容とする。

- ◇ 日本列島北部における人類史のはじまり（旧石器～縄文時代）
- ◇ 農耕社会の成立と狩猟採集社会（続縄文時代～16世紀）
- ◇ 変わりゆく「交流」（17世紀以降）

◆ アイヌとシサム【文献核】

「エミシ」から「エゾ」への変遷の経緯からはじまり、安藤氏の関わりから拡大する道南の和人社会との関係、松前藩や幕府の支配、場所請負制下での状況、そして幕末以降増加する和人との関係について、主に文献を用いて紹介する（「シサム」は和人の意味）。

- ◇ エミシ・エゾと私たち
- ◇ 松前トノ（松前藩）の成立と私たち
- ◇ 場所請負商人と私たち

◆ 私たちのまわりが大きく動く【近現代核（1）】

アイヌの社会が大きな衝撃を受けた明治維新から昭和戦前期に相当する1870年頃～1930年代を扱う。近現代のアイヌに、決定的といってよい大きな影響を与えた、日本国家による北海道の「内国」化、日露の国境画定等を取り上げる。

- ◇ 土地・自然と人の“内国”化 —北海道—
- ◇ 日露国境画定とサハリン・千島の私たち —サハリン、千島—
- ◇ 植民地区画の進行、「北海道旧土人保護法」の制定と私たち —北海道—
- ◇ 近代化による社会の大きな動きと私たち
- ◇ 時代にいどんできた私たち

◆ 現在（いま）に続く、私たちの歩み【近現代核（2）】

1930年代以降の、第二次世界大戦と戦後の世界、日本における高度経済成長、世界的な先住民族の権利回復の動き等、これらの要素を押さえつつ、現在までを対象とした展示とする。

- ◇ アジア・太平洋戦争，第二次世界大戦と私たち（1930年代後半～1940年代）
- ◇ 戦後社会のなかの私たち（1950年頃～60年代前半）
- ◇ 私たちが向き合う現在／ともに作りたい未来（1960年代後半以降）

8. 子供向け展示

未就学児や小学校低学年を対象として、ハンズオン等の体験型の展示手法を多用しながら、六つのテーマに沿って興味を持って学べる空間とする。

表 国立アイヌ民族博物館基本展示 中・小テーマ一覧

	大項目	大項目を構成する中・小テーマ項目				
基本展示	私たちの世界（信仰）	カムイのくらす世界（カムイと自然）	儀礼のあらまし	さまざまな儀礼	あの世（死生観）の とらえ方	周囲の文化との比較
	小テーマ	・神謡とカムイの姿 ・国造り神話 ・自然のなかのカムイ ・ラマツの観念	・ヌサ（祭壇）、イナウ（木幣） ・イクバスイ（捧酒筥） ・折り詞	・季節による儀礼 ・イオマンテ（霊送り儀礼） ・イワクテ（道具送り） ・現代の儀礼の復興	・アフナルパロ（あの世の入り口） ・先祖供養	・削りかけ、削り花 ・シャマンの太鼓 ・サクたたき棒 ・越境する宗教
	私たちのくらし	今に息づく装い	住まう —私たちの祖先がくらす生活空間—	受け継がれる食文化	人の一生	受け継がれる芸能文化
	小テーマ	・衣装の種類・地域差・制作過程 ・受け継いできた人々 ・衣装以外の装身具 ・装いとしてのいれずみ	・集落の立地と景観 ・生活空間	・祭りの食卓から ・日々の食卓から ・生活の中に息づく伝統食	・さまざまな人生儀礼 ・さまざまな遊び	・各地域で伝承されてきた踊り ・伝承されてきた歌 ・伝承されてきた楽器
	私たちのしごと	先祖のしごと【江戸後期～明治】	激動の時代のなかで【明治～昭和】	現代のしごと【平成～】		
	小テーマ	・マキリ（小刀） ・狩猟 ・漁撈 ・採集 ・農耕 ・漁場労働	・農業 ・漁業 ・林業 ・畜産業（酪農、競馬） ・観光業 ・さまざまなしごと ・伝統の継続	・隣り合う人々（1） 海外でのしごとと暮らし ・隣り合う人々（2） 日本各地でのしごとと暮らし ・伝統文化を活かす、広げる ・未来のしごと		
	私たちの交流	生活圏と海を越える交流【近世】	人びとをつなぐモノ【近世～近代】	外から見たアイヌ文化【近世～近代】	海外の先住民族との交流【近代～現代】	
	小テーマ	・旅・移動手段 ・北海道アイヌとその周辺（本州：和人） ・権太アイヌとその周辺（北サハリン～大陸：ニヴフ、ウイльтаほかツングース系諸民族） ・千島アイヌとその周辺（カムチャツカ半島～北米：イテリメン、アリユート）	・朝貢、交易、労働の場 ・儀礼の宝物 ・絹・木綿の流入と衣装の形態	・交流・踏査の記録としての画像資料 ・異国／異域／異民族のまなざしに映るアイヌ文化 ・博覧会への出場・出品	・〈伝統〉を魅せる—観光地そして「保存会」 ・世界各地の先住民族との交流 ・海外における先住民族政策	
	私たちのことば	アイヌ語の基礎	アイヌ語の歴史とことばの復興	アイヌ語地名	アイヌの口承文芸	アイヌ文学
	小テーマ	・アイヌ語の現状 ・発音と文字 ・ことばの仕組み ・さまざまなアイヌ語 ・アイヌ語の方言	・周辺地域のことば ・さまざまな外来語 ・古文書に見るアイヌ語 ・アイヌ語と近現代 ・アイヌ語の復興とこれから	・アイヌ語地名とその分布 ・現代のアイヌ語地名	・口承文芸とそのジャンル ・口承文芸の語り方と内容	・近現代のアイヌ文学 ・多様化するアイヌ文学
	私たちの歴史	イントロダクション：私たちの歴史のひろがりをつらなり【イントロ】	遺跡から見た私たちの歴史【考古核】	アイヌとシサム【文献核】	私たちのまわりが大きく動く【近現代核（1）】	現在（いま）に続く、私たちの歩み【近現代核（2）】
	小テーマ	・私たちの歴史のひろがり ・私たちの歴史のつらなり ・向けられる視線の意味	・日本列島北部における人類史のはじまり（旧石器～縄文時代） ・農耕社会の成立と狩猟採集社会（続縄文時代～16世紀） ・変わりゆく「交流」（17世紀以降）	・エミシ・エゾと私たち ・松前トノ（松前藩）の成立と私たち ・農耕社会と私たち ・場所請負人と私たち	・土地・自然と人の“内国”化 — 北海道— ・日露国境画定とサハリン・千島の私たち—サハリン・千島— ・植民地区画の進行、「北海道旧土人保護法」の制定と私たち—北海道— ・社会の大きな動きと私たち ・時代にいどんできた私たち	・アジア・太平洋戦争、第二次世界大戦と私たち（1930年代後半～1940年代） ・戦後社会のなかの私たち（1950年ころ～60年代前半） ・私たちが向き合う現在／ともにつくりたい未来（1960年代後半以降）